



手稲開村 150 年の記念事業を展開

手稲の“自治のはじまり”は、1872（明治 5）年、旧土族の集団移住がきっかけとなって「手稲村」が誕生したことに遡ります。2022（令和 4）年は それから 150 年という節目にあたることから、手稲郷土史研究会（永井道允 会長）では『見る 聞く 学ぶ 手稲の歴史』と題して 記念事業を展開。11 月までに講演会とパネル展を催しました（後援：札幌市手稲区）。

講演会 第一回…10 月 15 日（土）午後 2 時から、手稲区民センター ホールにおいて 記念事業の第一弾となる講演会が開かれ、150 名が参加しました。講師は 札幌市博物館活動センター 学芸員の古沢 仁さん。『札幌の地史から見た手稲』をテーマに、地形の成り立ちや発掘化石などについてお話いただきました。

「手稲の土地の歴史を探るには、地球誕生やプレートの衝突を 起点としなくてはならない」と、壮大なスケール感で語られる“石狩低地帯”“縄文海進”“星置川扇状地”“手稲山の山体崩壊”の解説は、まるで 地学の授業のよう。手稲の地名由来（ティネ・イニアイヌ語で「濡れているところ」の意）に納得し、地形が 産業や人々の暮らしにおよぼす影響に 想いを致しました。新発寒の中の川の下流域でクジラの化石が発掘されたことが示されると 会場も盛り上がり、古沢さん持参の化石の実物標本を真剣に観察する人も…。また、幕末の探検家 松浦武四郎が通ったと伝わる銭函道（国道 5 号の前身）の話題では、自分の足で実際に歩いて その証拠を掴みたいと思われた参加者も 少なからずいたようです。当日の抄録を 小紙 P.2～P.3 に掲載しました。ご参照ください。

パネル展…10 月 28 日（金）～11 月 6 日（日）、JR 手稲駅自由通路「あいくる」にて開催、延べ 2,800 余名が来場（カウントは日中時間帯のみ）。まちの歴史を紹介するパネル 23 枚をはじめ、アルバムにみる昭和の風景「ちょっと昔の手稲」100 点、地形とマチのクロスロード「謎解きさっぽろ」手稲区編 5 点（提供：札幌市博物館活動センター）、写真パネル「懐かしの手稲駅周辺」8 点（提供：手稲まちづくりセンター）を掲示したほか、モニターでスライド上映も行いました。

アンケートによると、事前に知って訪れた人だけでなく「たまたま通りかかって」との回答も 4 割近くあり、会場立地の良さを実感。とくに注目を集めたのは 当会会員らのアルバムの中に眠っていた写真を紹介するコーナーで、「懐かしいね」と 観覧者同士で思い出話に花を咲かせる姿が 印象的でした。歴史パネルを熟読する人も多く、「手稲のことは知っているつもりだったが 今回 認識を新たにした」、「手稲と加賀前田家や仙台白石城との関わりについて 初めて知った」などの感想が寄せられ、常設展示や 郷土資料館の設置を望む声は、当会にとっても大きな励みとなりました。 [J]



講演会 第一回（10/15）



パネル展 会場風景（10/28）

プレート」が沈み込むことで形成されました。およそ 1500 万年前、ユーラシアプレートと北米プレートの辺縁部に亀裂が入り、徐々に拡大、やがてこれが日本海とオホーツク海となり、プレートの一部が太平洋にせり出す形で日本列島の原型が完成します。

800 万年ほど前になると、ユーラシアプレート起源の北海道西部と北米プレート起源の北海道中央部・東部との間に、深い海峡「石狩トラフ」が形成されました。500 万年前以降、石狩トラフ周辺の火山活動が活発になり、手稲山を含む札幌西部の火山が次々と噴火する一方、海は徐々に浅くなっていきます。150 万年前以降、石狩トラフに堆積した地層を東西から圧縮する力が働き、地層が褶曲すると、それぞれの尾根が馬追、野幌、月寒の丘陵となりました。石狩地方でもこの背斜構造によって油田が形成され、後に原油が採取されるようになりました。

氷期の真っただ中であつたおよそ 4 万年前、支笏火山が大規模な噴火を繰り返し、太平洋と日本海を結ぶ低地帯を火砕流が埋め尽くします。およそ 1 万年前、氷期が明け、暖かさで融けた氷や雪が、勢いよく山肌の岩石を下流へ押し流し、扇状地を形成していきました。その後、海の侵入と後退、川の氾濫などが繰り返されることで沖積平野「石狩低地帯」が成立しました。



手稲のセミクジラ科化石
胸椎(左)と腰椎(右)の前面観

2. 手稲で発見されたクジラ化石

2002 年に南区小金湯で発見された「サッポロカイギュウ」は、現在も太平洋やインド洋の暖海域に生息するジュゴンに近い動物ですが、大きさがその 2~3 倍近い大型のカイギュウ類です。サッポロカイギュウは、それまでジュゴンサイズの先祖型のカイギュウが、およそ 820 万年前に札幌周辺の海で大型化し、北太平洋に拡大分布したことを明らかにしました。

2008 年に同じ南区小金湯で発見されたクジラ化石は、体長が 14m に達するおよそ 900 万年前のセミクジラ科の化石で、現在研究中ですが、サッポロカイギュウ同様、札幌周辺の海で大型化した可能性があります。

手稲区新発寒のポンプ場近くからは、およそ 6000 年前、縄文海進と呼ばれた時代に当時の海岸に漂着したと思われる大きなセミクジラ科の化石が産出しています。札幌からは、大型化したセミクジラ科の祖先と子孫の両方が化石として産出していることとなります。

3. 武四郎の歩いた手稲への道

手稲郷土史研究会の研究部長からいただいていた宿題「松浦武四郎は手稲のどこを歩いたのか…」について、北海道大学附属図書館所蔵の『札幌郡西部図』(以後「西部図」)を基に検討してみました。

「西部図」は 1873 年に飯島矩道・船越長善によって描かれたもので、河川などは比較的正確に描かれていると思われます。これを国土地理院発行の地形図の上に重ね、豊平川の流路やモエシ沼などが重なるように図形を修正してから、そこに描かれた道路を描き写し、地形図に重ねると、「西部図」に記録された道を現在に反映させることができます。すると、手稲を通る「西部図」の道は、現在の国道 5 号よりも平地(海)側を外回りに大きく迂回していることがわかりました。

いずれ、この道がなぜここを通ったのかを、実際に歩いて検討したいと考えています。



「札幌郡西部図」(1873 年)北海道大学附属図書館所蔵

富丘西公園の生きものたち

手稲郷土史研究会 会員 菅原 純子

■富丘西公園の概要

『富丘西公園』（手稲区富丘4～5条5丁目）に息づく豊かな自然についてご紹介しましょう。手稲の山裾の住宅街に孤島のように残るこの緑地は、1998年に地区公園として整備・告示されました。針広混交の樹林地と日当たりのよい草原からなる周囲1kmにも満たない狭い範囲ですが、絶好のバードウォッチング・ポイントで、私は開園の頃から家族で親しんできました。とくに春と秋の渡りの季節には多くの野鳥との嬉しい出会いがあります。また札幌のシンボルフラワーでもあるスズランが自生するなど、在来の野の花ばなもあちらこちらで楽しめます。



春の樹林地

野趣あふれる風景はまるで原生林を思わせますが、実は、馬を放牧する草場がその大部分を占めていたと聞きました。それからわずか50年余りで、現在のようなこんもりとした雑木林（二次林）が自然の力だけでつくられたというのですから驚きます。

■富丘西公園のスズラン

『富丘西公園』には、札幌市内で唯一ともいえるスズランの群生地があります。このスズランは日本固有の在来種で、観賞用のドイツスズランに比べると香りが淡く、君影草きみかげそうの別名のとおり、葉の陰にひっそりと小さな花を咲かせるのが特徴です。

富丘から手稲本町にかけての一带は、古くからスズランの名所でした。昭和初期の新聞には“軽川のリリー”の名でその開花状況が報じられ、札幌の女流作家 第一号である森田たまの小説『石狩少女』いしかりおとめでも“軽川の鈴蘭”は登場します。また、1929年の火災で校舎を焼失した手稲中央小学校では、グラウンドの整備資金にまちの青年団がスズラン狩りの入場料を充てたといい、校歌にも「香り豊かに白き花すずらん咲ける学びやの…」と謳われています。1960年、スズランは札幌の“市の花”に選定されますが、都市化に伴って次第に減少し、野生ではほとんど見ることはできなくなっていました。肝心かなめの(?)札幌市役所の庭の植栽でさえ、いまはドイツスズランです。

1994年、手稲区富丘に造成される公園のための調査に入った植物の専門家が、わずかに生き残っていたスズラン（結実した状態）を偶然発見。既に進められていた公園計画は、貴重なスズランの保護区域を新たに設けることとなり、大幅に見直されました。ところが、オオアワダチソウなどの帰化植物やススキなど背の高い植物に圧迫されて、再びスズランは消滅の危機に瀕してしまいます。そこで、2004年から行政と公園を利用する地域住民の協働による、年数回の保全作業が始まりました。この地道な取り組みが功を奏してスズランは徐々に復活し、毎年5月下旬から清楚な姿を楽しめるようになりました。私も当初から活動に参加し、観察会などの資料作りにも協力しています。

オオウバユリもまた『富丘西公園』の特徴的な植物です。やや湿った土地を好むことから、手稲(=テイネ・イ)の昔の植生を示すものともいえるでしょう。

園内にかつてあったオオウバユリの大きな群落も、土地の乾燥化やオオイタドリなど繁殖力の強い植物の影響で、衰退が危ぶまれるようになりました。現在は、スズランへの取り組みと併せて保全のための作業が行われています。7月中旬、薄暗い林床で淡いクリーム色の花を咲かせるようすは、なかなか壮観です。



スズラン



オオウバユリ

■富丘西公園で見られる花ばな

園内では季節ごとにさまざまな植物が楽しめます。春は“スプリング・エフェメラル”と呼ばれる キクザキイチゲ、エソエンゴサク、オオタチツボスミレ、ニリンソウ、フデリンドウなどの儂げな花とともに、エゾヤマザクラ、カスミザクラ、ミヤマザクラ、イタヤカエデ、ハウチワカエデといった木々の花も新緑に彩りを添えます。初夏の林床は マイヅルソウ、クルマハソウ、クゲヌマラン、フタリシズカなど白色の花が清々しく、不思議な形のマムシグサにはハッとさせられます。真夏の草原では ナワシロイチゴ、コウゾリナ、エゾヤマハギ、ツリガネニンジン、オカトラノオ、ヨツバヒヨドリなどが 絵の具のパレットのように広がり、やがてアキノキリンソウ、エゾノコンギク、シラヤマギクが秋の訪れを告げてくれます。ツリバナ、マユミ、ノイバラ、ナナカマドなど 赤い実が目立つ 晩秋の樹林地では、団栗拾い（クリ・ミズナラ・カシワの実）を楽しむ親子の姿も微笑ましい…。

近年、心配されていることに 盗掘があります。山菜として知られるユキザサ（あずき菜）や 案内看板で紹介しているサイハイランなどは、急激にその数を減らしています。ランの仲間のいくつかは 既に失われてしまいました。希少な植物をシャベルで掘ったと思しき跡を見つけるたび、憤りを覚えずにいられません。「公園の植物は 市民の大切な財産である」という意識をなぜ持てないのでしょうか。

■富丘西公園で会える動物たち

『富丘西公園』を“すみか”として繁殖する野鳥（留鳥）には、アカゲラ、コゲラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ハシブトガラ、ゴジュウカラ、ヒヨドリがいます。ハクセキレイ、シメ、ミヤマカケスなどもよくやって来ます。

渡り鳥として訪れるのは、アオジ、キビタキ、オオルリ、ルリビタキ、メジロ、カワラヒワ、マヒワ、キジバト、センダイムシクイ、アカハラ、マミチャジナイ、コムドリ、ビンズイ、ツツドリ、ツグミ、アトリ などでしょうか。数年前には 猛禽のチゴハヤブサが営巣し、子育てから巣立ちまでを観察することができました。

国の天然記念物 クマゲラの“舟彫り”も複数の樹木に残っています。運が良ければ、手稲山周辺から飛来する 愛らしいシマエナガにも会えるかもしれません。

草原では、チョウやトンボが 春から秋まで 飛び交います。アゲハチョウの仲間、タテハチョウの仲間、シジミチョウの仲間、シロチョウの仲間、ヤンマの仲間、サナエトンボの仲間、そして 幾種類もの“赤とんぼ”。草陰には バッタやキリギリスの仲間が潜み、林内では セミたちもにぎやかです。クワガタやカミキリムシの仲間も確認できました。“サッポロ”の名が付くカタツムリも…。

また、樹間をすばしこく動き回る エゾリスの出現には 心が躍ります。木道で日向ぼっこをするカナヘビさえもいとおしい？

■生物多様性を学べる場

「自然のものに手を加えるべきではない」という声をとときどき耳にしますが、本来そこにある在来種が 帰化植物や庭から持ち込まれた園芸種によって生長が阻まれることには、警戒をしなくてはならないと感じています。

『富丘西公園』は、身近に生物多様性を学べる 貴重な空間です。また、森林浴を体感できる 癒しの場でもあります。生きものたちとの出会いを楽しみに、これからも大切なマイ・フィールドとして 見守りたいと思います。

※当日は『富丘西公園の植物暦 ～季節ごとに会える植物たち～』（2009年・手稲区土木部維持管理課公園緑化係）と『スズランやさまざまな植物にふれあえる 富丘西公園』（2020年・札幌市手稲区）を参考資料としてお配りしました。



クゲヌマラン



ツリガネニンジン



オオルリ（夏鳥）



アカゲラ（留鳥）



コゲラ（留鳥）



クジャクチョウ

「手稲本町」の歴史秘話（2）

▶ 市街地の大火と消防組織…

軽川市街は、明治 19（1886）年、同 39（1906）年、昭和 19（1944）年、同 41（1966）年と、四度大火に見舞われました。とくに、明治 39 年の火事では市街地の三分の一に当たる 50 余戸が焼失し、昭和 19 年にも 21 戸が全焼しています。また手稲中央小学校は 明治 38（1905）年 ※当時は下手稲尋常小学校 と昭和 4（1929）年 ※当時は下手稲尋常高等小学校 に校舎が全焼し、一度目の火事のあとには近隣の温泉宿 ※現在の銭湯「藤の湯」の前身を校舎代わりに使っていたと伝わります。



公立手稲消防組
〈札幌市手稲消防団『あゆみ』より〉

手稲における消防のはじまりは、私設の組織でした。明治 28（1895）年、軽川の世帯数が 100 戸を超えるようになり、村上藤吉^{むらかみとうきち}ほか有志 30 名が防災のため「軽川消防組」を創設しました。明治 34（1901）年には「公立手稲消防組」として認可され、船木與八^{ふねきよはち}が組頭を務めます。組織はやがて「手稲消防団」の乙黒定七^{おつぐろさだしち}らへと受け継がれていき、前田地区の野火や牧場火災などでも活躍。現在も地域の安全を目指して訓練に励んでいます。



昭和 40 年撮影 手稲町庁舎
〈札幌市手稲記念館 所蔵〉

▶ 手稲町時代の名残 市道「役場前線」…

現在、「手稲コミュニティセンター」が建つ手稲本町 3 条 1 丁目には以前、手稲町の庁舎がありました。

建物は、旧陸軍が大正 10（1921）年に設置した「石狩無線電信所」（通称：軽川無電）の施設のうちのひとつで、昭和 4（1929）年の閉鎖ののち手稲村が譲り受け、昭和 8（1933）年、役場としての改装工事を終えて移庁式を迎えます。その後、手稲町庁舎に、そして昭和 42（1967）年の札幌市との合併後も札幌市手稲出張所（のちに西区手稲出張所）として昭和 59（1984）年まで使われました。手稲町時代には、議会場や公民館も周辺に並び、まちの機能を担う一画でした。「手稲コミュニティセンター」の北東側の市道の名称は いまも「役場前線」で、歴史の一端が垣間見えます。



昭和 45 年撮影
テイネオリンピアスキー場
〈札幌市公文書館 所蔵〉

▶ 合併を加速させた冬季五輪の開催決定…

手稲町と札幌市との合併の動きは、昭和 41（1966）年 4 月、冬季オリンピックの札幌開催が正式決定したことで、一気に加速します。オリンピックの招致には、手稲山を競技会場とすることが欠かせなかったからです。札幌市からは、この時期、総額 50 億円ともいわれる都市基盤整備費が手稲町に対して示されました。

合併を経て、手稲本町地区では“オリンピック道路”とも呼ばれる「手稲山麓線」が開通。手稲山の中腹にはスキー場やゴルフ場、遊園地などのレジャー施設も誘致されて、冬季オリンピックへの機運が高まってきました。

▶ 彌彦山と呼ばれた丘…

幾棟もの高層住宅が建つ手稲本町 2 条 5 丁目のあたりには『日本石油北海道製油所』の社宅がかつて並び、小高い丘の上には「彌彦神社」^{やひこじんじや}がありました。



昭和 10 年代撮影
彌彦神社に詣でる日本石油の職員
〈手稲郷土史研究会 所蔵〉

『日本石油』（現 ENEOS）の発祥は新潟県の出雲崎周辺で“彌彦信仰”が盛んな地域とも重なります。石油を採掘する際には詣でて安全を祈願したという歴史があり、手稲の地でも“石油の守護神”として大切

に祀られていたのでしょうか。廃社後、祭神は手稲山山頂の「手稲神社」の奥宮に合祀されました。手稲神社の裏参道に移設された石燈籠に刻まれた社名や、市道「弥彦通線」の名に往時が偲べれます。

また、「彌彦山」と親しまれたこの丘は子どもたちの格好の遊び場で、とくに冬はスキーでにぎわったといえます。

[編責：広報部]

* 参考文献：「手稲村史原稿」（仙堂 控え）、札幌市『手稲町誌』、札幌市立手稲中央小学校『郷土誌 がる川』、札幌市立前田小学校『郷土誌 まえだ』、手稲連合町内会連絡協議会・手稲鉄北連合町内会連絡協議会『手稲開基 110 年誌 手稲の今昔』、札幌市教育委員会『さっぽろ文庫 58～札幌の通り』、同『さっぽろ文庫 78～老舗と界限』、同『新札幌市史機関誌 札幌の歴史』第 13 号・第 25 号・第 26 号、札幌市手稲区『手稲でみつけた手稲のはなし』、同『手稲区歴史ガイドマップ』、手稲郷土史研究会『史料に見る手稲今昔～手稲歴史年表』、同「会報 郷土史ていね」、ほか。

特集★開村 150 年

「前田」の歴史秘話（1）

▶ 地名由来は酪農のパイオニアから…

JR 函館本線以北の広い範囲を指す「前田」という地名は、旧加賀藩の前田家が明治 29（1895）年に開いた『前田農場』軽川支場（のち軽川本場）にちなんでいます。昭和 17（1942）年の字名改正の前は、軽川や新川と呼ばれていました。

『前田農場』は 育牛から乳製品製造にいたるまでの大規模な牧場経営をおこない、「酪農のパイオニア」と称されました。これを範として、明治末期には『稲積農場』※^{いなづみのうしやう}駅や公園に名前が残るが、さらに大正期には『極東煉乳第一農場』※『興農園軽川牧草压榨所』より土地購入のちに『明治乳業』へ移譲などが周辺に誕生していきます。

昭和のはじめ、大農場で働く小作人の独立が北海道庁によって進められました。手稲村でも争議を伴わない農地解放がおこなわれ、前田での酪農を中心とした地域開発の試みは 自作農の人々へと引き継がれていったのでした。

▶ “馬鉄”が走ったまち…

現在の道道「石狩手稲線」（旧称：石狩街道）には 馬車鉄道が走っていた時代があります。大正 10（1921）5 月、手稲村の有志によって『^{がるいしきどう}軽石軌道株式会社』が設立され、翌年 10 月、軽川駅の北側と石狩の花畔を結ぶ 約 8km の営業が始まりました。

この鉄道には、貨物を運ぶ台車と 旅客を運ぶ客車がありました。客車は、札幌市街を走っていた馬車鉄道の払い下げで、軽川—花畔間を一日 3 往復。途中 4 カ所の停留所（新川・南四線・南七線・南九線）を設けて、始点より終点までは 約一時間の道のりでした。石狩方面から軽川へ 台車で運ばれていた貨物には、サケ、燕麦、小豆、亜麻のほか、採掘した原油や沿線農場で集荷した牛乳もありました。軽川からは、生活雑貨や漁港用の資材が石狩へ運ばれました。当時の街道は 人と物資の交流に欠かせないものでしたが、地盤が悪く、雨が降ったときなどは ぬかるんで通行困難となることも多かったため、馬車鉄道は大量輸送手段として期待されたことでしょうか。しかし、冬季間は運行休止。営業状況も赤字が続きます。さらに道路整備やバスの利用が進んだことにより、昭和 12（1937）年 9 月、営業停止となりました。



車輪がデザインされた
「前田大橋」の欄干

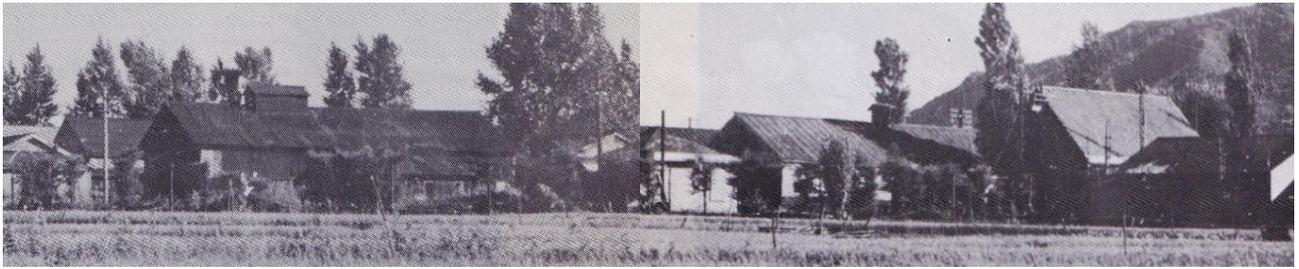
「軽川」に架かる『前田大橋』は、その欄干に大きな特徴があります。“馬鉄”が走ったまちの名残を刻みたいという 住民の声を反映したデザインです。たった一對の車輪ですが、そこには意味があり、地域の歴史が秘められています。なお、「軽石軌道」は「がるいしきどう」が正式な社名で、「けいせききどう」は通称です。



大正 11 年『前田農場及林業所』より
「前田農場軽川本場」
〈札幌中央図書館 所蔵〉



昭和 34 年撮影 明治乳業の牧場
〈乙黒千秋氏 所蔵〉



撮影年不詳 日本石油北海道製油所 〈前田小学校『郷土誌まえた』より〉

▶ 日本石油北海道製油所…

かつて、手稲区役所や市道「手稲駅北口通」のあたりには『日本石油』（現 ENEOS）の製油所がありました。操業開始は 明治 45（1912）年。おもに 石狩川河口北岸の「石狩油田」で採掘された原油が、埋設した送油管で花畔・花川を経由して製油所まで送られました。また 勇払郡厚真や 宗谷郡増幌の油田からもタンク車で軽川駅まで運び入れていたそうです。広大な敷地には蒸留装置のほか、貯蔵タンク・倉庫・製缶などの関連施設も備えられ、揮発油・灯油・軽油・機械油・重油が精製されていました。供給先は道内のみならず樺太にまでおよんだといい、北海道で最大の製油所でした。

第二次世界大戦末期の昭和 20（1945）年 7 月、製油所は米軍機による爆撃を受けます。誘発火災でタンク 7 基が炎上、建物の一部も延焼。タンクは三日間にわたり燃え続けました。

戦後は 産出油の減少という問題を抱えながらも操業を続けますが、昭和 25（1950）年 6 月、精製事業を休止。原油は 秋田製油所などへタンク車で送られるようになります。同 35（1960）年、手稲駅からの原油輸送が停止。やがて、安価な外国産原油を大型タンカーで輸入して大量生産する時代へと変わっていき、北海道製油所はその役目を終えました。

▶ ウィスキー工場へも運ばれた泥炭…

前田地区のほとんどは昔、泥炭地でした。泥炭とは 湿性植物などが枯れて堆積し、長い時間をかけて炭化したものです。水はけが悪く 栄養分も少なく 農耕には適さない土ですが、燃料（草炭）に使うことができ、昭和の戦中・戦後の物資不足を補いました。



泥炭
〈村山耀一氏 所蔵〉

昭和 20（1945）年、『北農軽川草炭工場』の事業に乗り出した北聯（現ホクレン）は、泥炭を採取して製品化。この“軽川のピートモス”は 燃料だけでなく、ウィスキーのスモーク香に欠かせないものとして、ニッカウヰスキー余市工場へも一時期納められていたそうです。 [編責：広報部]

*参考文献：札幌市『手稲町誌』、札幌市立前田小学校『郷土誌 まえた』、札幌市立手稲中央小学校『郷土誌 がる川』、札幌市手稲区『手稲でみつけた手稲のはなし』、同『手稲区歴史ガイドマップ』、ほまれ町内会『思い出で綴る ほまれの 30 年』、東宮駐輦記碑移設委員会『知られざる手稲と加賀百万石～手稲前田と前田農場～』、手稲郷土史研究会「会報 郷土史ていね」、手稲区地域振興課・手稲郷土史研究会『前田の地名のおこり 酪農の礎を築いた「前田農場」』パネル、ほか。



★「ていねく情報・文化発信コーナー／ていぬの部屋」がオープン 『ていねく情報・文化発信コーナー／ていぬの部屋』が 11 月中旬、手稲区役所 1 階に正式オープンしました。手稲郷土史研究会も区と連携し、現在、地域の歴史秘話を紹介するパネル 10 枚を展示中です。当会の 林俊一 会員が所蔵する「手稲鉱山」ほかの鉱物見本や 三菱マテリアル株式会社提供による「手稲鉱山」の精巧な坑道模型も置かれています。開室は、平日の 8 時 45 分から 17 時 15 分まで。どうぞお立ち寄りください。

次回定例会 ⇒ 発表内容「北海道科学大学百年史」渡辺泰裕氏（北海道科学大学 前学長）／1 月 11 日（水）18：15～手稲区民センター 3 階 視聴覚室 ※マスクの着用をお願いします。会員でない方のご参加は 申し込みが必要です。